

隼人族の森を渡る風

友に捧げる鎮魂詩

レクイエム

もしも天国があるのなら
今頃はそこで念願の名車サニークーペ1200
GLを運転しているのだろうか

初めて会った時の君の相貌は
頑健なバリバリの誠実を形容に相応しい男だった
それは四年前のこと
古くて小さい就職課の部屋で
歳が近いこともあり
同僚ということもまらず
将来を語るの良き相談相手になってくれていた君
だった



六月、病氣治療を理由に仕事から離れたけれど
きつと還ると君は約束したではないか
三日前に病院で会った時などは
自分の病氣治療のことよりも
僕の生き方に興味を持ってくれていた君では
なかったか
今日の午後にも退院して云々と語ってくれた
じゃないか

まさか、そんなに病が蝕んでいたなんて

新校舎移転の時、君は

誰よりも多く僕の本を運んでくれた
その動きに誰もが回復を確信させられた
バ力だよ、年金も受け取らずに逝くなんて
納得いかない案件まで飲み込まないで、
サボれば良かったのに

突然の訃報の届いたその夜は、
僕の涙は留まることを知らなかった

悔しいのだ
悲しいのだ

これでは正義などないことになるのではないか
君がいなくなる意味が解らない
これが運命なんて、虚しすぎやしないか

今年の冬は厳しかった
それでも

庭先の梅が咲いたというのに
君は桜のように、潔すぎた

葬場に運ばれてきた君は
すべての苦しみから解放された安堵の表情
その薄臉を君のお嬢さんは
そっと優しく閉じさせてくれた